原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第百八十八号

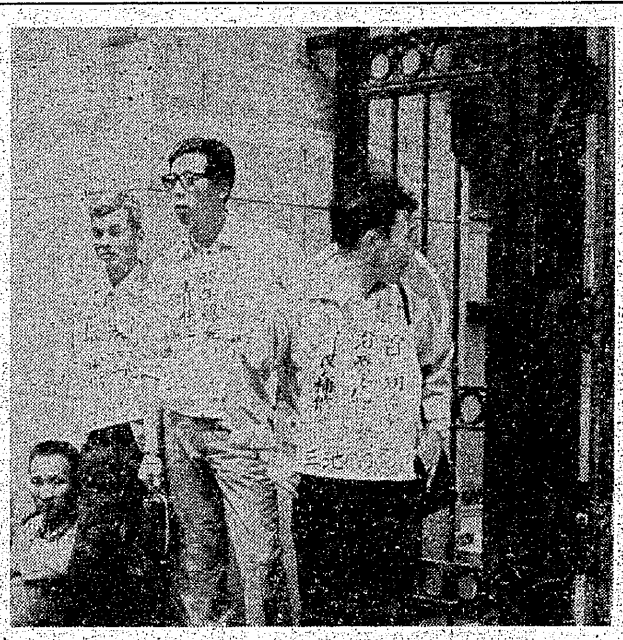
原告団レポート

CO患者——加藤 秀雄さん

つのる怒り、妥協せず

闘争後の配転、そして被災、今また……

患者としての誠意ある取り扱いを



オートバイで長崎オルグ。三池闘争中のスナップ。

上の写真は、三井鉱山への抗議のため上京して行動中のもの。

体内ふかく

大牟田市新港町、三川鉱社宅百三棟。ここは新港社宅でもはずれの方で、すぐ横が新港グラウンドそしてCO患者のための造成職場である新港作業所の近くでもある。

社宅から社宅へ通ずる道も、あちこちに背丈ほどにものびた雑草が生い茂り、そのまま放置され、新港グラウンドも以前のように利用されていないのか、草地と見まちがうばかり。

一歩道路に出ると、片方には港務所、木材置場、その他があり、大型ダンプが行き交う。よい環境ではない。

CO患者—加藤秀雄さんを訪ねたのは、暑い日の午後七時過ぎ。奥さんの帰りが遅いとのことで、加藤さんと二人の子供さんの三人の夕食が、ようやく終ったところだった。しばらくして奥さんも帰宅される。

障害等級十四級と認定された加藤秀雄さんの症状を、昭和四十六年のカルテから拾ってみると「精神症状——軽度の神経症的態度、軽度の情意鈍麻、軽度の神経過敏。神経症状——腱反射・右欠、右上肢・筋硬直」とある。軽度とはいえ、CO患者に共通の精神・神経の乱れがある。

三川鉱炭じん大爆発からすでに十八年になる。いまは軽作業とはいえ、どうにか仕事ができるようになって、普通の人と変わらないように見えるが、その精神的烙印は、彼の体内ふかく沈でんしているであろう。

彼の周辺にも、一時の危機的状態から脱けだしたとはいえ、記憶が欠落し、運動神経に障害が残り性格の変調、性欲の減退、抑うつ状態、そしてなんらかの因果関係をもつであろうと思われる、内臓や諸器官の変調を訴える、さまざまのCO患者がいる。

渦中の結婚

加藤さんは昭和十年八月十七日生まれ（四十六歳）で、三井三池鉱業学校の電気科を二十九年に卒業。そのまま入社すると、すぐに本所電気（三池鉱業所のすべての事業所、社宅などの電気工事、補修を行っていた）に配属された。

本所電気での勤めは三池闘争時まで続き、終結後の配転で三川鉱の坑内へ。乙方開発の仕繰工として働くことになるが、なれぬ坑内での仕事に加え、闘争後の変容した職場、差別などの中で、硬片付けにはじまり、枠回収、岩捲き、小切羽掘進、棹取（運搬）など、さまざまな作業に従事する。

三池闘争中は本所支部の行動隊員として、おもに支部詰めで活動した。そして闘争中のエピソードが——。

加藤さんは、あの激しくたたかわれた三池闘争の中で結婚している。「だれも知らんとですよ。だれにもいわずに、支部には風邪で二、三日休むからといって、そのあいだに結婚式をして……」

三十五年五月三日というから、まさにまっただ中だ。三月二十九日に久保清さんが刺殺され、四月六日に藤林あっせん案が出て苦悩の炭労大会。四月十八日には三川鉱での強行入構。そして五月四日ポッパーの第一次仮処分決定。五月六日には執行吏がポッパーに来ているから、ポッパー周辺の状況がいよいよ緊迫しつつあった時期である。

奥さんの貞子さん（昭和九年一月十九日生まれ）と知り合ったのは、かなり前にさかのぼるが「恋愛ですか……」とたずねると「いや—知り合いですよ」という。

奥さんの姉婿が同じ新港町に住んでおり、散宿（社宅の電気の故障、修理を勤務時間外に担当していた）をしていたので、同じ本所電気の同僚でもあり、たびたび遊びに行っていたので、知ってはいたが「まさか結婚するとは思っていなかった」——と。

やがて奥さんの姉婿が「一緒にならんか」と話が出て「交際期間も一ケ月ぐらいだった」そうだ。

加藤さんには、ほかに意中の人もいたようだが、ほかならぬ三池闘争そのものが、人の別れと離れがたい人との結びつきを作ったといえる。

苦の中から

貞子さんは若いころ洋裁学校を出て、それからずっとミシンを踏むベテラン。前に勤めていた工場がつぶれて、いま市内の某ニット工場に勤めているが、手取りは平均九万円ぐらい。加藤さんも新港作業所だから、ちょっと多いぐらいか。奥さんの支えがなかったらとても子供を学校へやることもできない生活だったろう。

長女の朱実（あけみ）さんは、昭和三十六年三月生まれで二十一歳。保育短大を卒えて市内の〝みどり保育園〟に勤めるホッカホカの保母さん。「趣味は——」と聞くと、笑いながら「家事かな…」ややあって「旅行かな……」と明るいお嬢さんである。

長男の秀樹くんは昭和三十九年六月生まれ、いま大牟田高校の電気科の二年生。かなり背が高く、陽焼けしている。一メートル七十六センチというから、高いと思っていた父親の秀雄さんより五センチも高い。なにかスポーツをやっているかと聞くと、「中学時代は陸上をやっていたが、今はやっていない」とのこと。

こうして加藤さん一家は、ささやかな幸せとも思える時期であるが、彼には幼年期に戦争をくぐってきた苦しい時代があった。子供のころは「父親って写真を見て知っていたぐらい」で、あまり一緒に暮らしていないという。それというのも、三十六年に亡くなった母親とは、加藤さんが九歳の時に離婚しており、それからは本籍地の大牟田市神田町で衣料品の店を細々と営みながら、母親の手ひとつで育てられたからである。炭鉱の鉱業学校へ入ったのも、当時としては自然のなりゆきといえるものではなかったか。

昭和三十八年十月も末、あのいまわしい炭じん爆発が起こる二週間前に、加藤さん一家は神田町から新港社宅へ引越した。

爆発

そして十一月九日、土曜日の二番方。「入坑中で、四百五十メートル坑道の水平人車に乗ってすぐでしたよ。まっ黒い煙がきて息ができなくなり、爆風で人車がガタガタゆれる。しばらくすると、だれかが〝苦しかー〟と声をあげる。うずくまっている者もいた。まだ煙があったが、斜坑の方へ行くと材料線の捲立で火傷で倒れている者がいたり、運搬詰所が吹っ飛んでいたので〝ただごとではない〟と思った。〝火薬庫の爆発やろか〟という声も出た。とにかく急がねばと、松板で仮の担架を作り、四山の方へ運んだ」。

彼の場合、人車の中にいたことが不幸中の幸いということになるが、「人車の外にいたら、爆風でたたきつけられていただろう」という。

仮の担架をかついで四山へ、四山鉱口から昇坑。午後八時すぎには、いったん家に帰った。

乙方開発分会の配役調査（差別配役に対処するメモ活動）を担当していた加藤さんは、三川支部にかけつけ、手帳のメモをたよりに配役箇所をたどりながら、分会の同僚たちの確認作業に当たった。あとの話では、車に乗って病院にも行ったが、なぜか記憶にない。

ふたたび家に帰ったのは、翌十日の朝十時ごろ。近所の広沢修功さん（死亡・元大牟田市議）の葬儀を手伝った。人の話では、その時から少しおかしかったという。オートバイに乗っていても、道がゆれるようだったが、自分では疲労だと思っていた。疲れ果てて奥さんの実家に行き、三日間寝っぱなしだったそうだ。

どうもおかしいということで、十六日になって天領病院で診察を受ける。いったんは帰宅したが、十八日夕食時に突然倒れ、入院した。入院は長くはなかったが、退院してからも毎月一回きまったように、三十八度から九度の発熱を起こし、右足が突っ張り、右半身にけいれんがあったので、夜中などはほんとうに困りました——と奥さんは当時の症状を語る。奥さんは、そのとき長男秀樹くん（二ケ月）をみごもっていた。

つのる怒り

やがて加藤さんは、回復訓練を経て新港作業所へ。中学生のころ絵が得意だった彼は、なんにでも凝る性格らしい。趣味も多種多様で、囲碁、釣り（ヘラブナ、ハヤ）、今はやらないがパチンコ、マージャン、それに体のためにとゴルフ（金がかからぬように、もっぱら打ちっ放し）等々数えたらきりがない。

その彼は、CO分会の委員や副分会長、新港地域の書記長、原告団の事務局長などを勤めた活動家でもある。「やる時には懸命にやるけれど、納得できなければ…」なにが彼をそうさせるのか、「妥協はしたくない」という。

「結論はともかく、上村裁判や山野の裁判でも、和解という方向が出てきたが、この流れには危惧を感じる。会社の姿勢も強いし、簡単にはいかぬと思うけれど、たたかうしかない。そのためには、原告団ももっと頑張らねば——」

さらに「坑内への転職を希望したが、会社はCO患者として取り扱おうとせず、勝手に指名したりして〝慈善事業ではない〟などといっているが、爆発を起こした責任の一片すら放棄し、遺族や患者を放りだすようなやり方に腹が立つ」と会社に対する怒りは、さらにつのる。

新港町の自宅で語る加藤さん。